

# マイスターのささやき「レンタカーで巡る 世界遺産！」

大阪府豊中市 世界遺産マイスター 森瀬 英司

## ◇第6話 (番外編Ⅱ)「カトマンズの谷」(ネパール連邦民主共和国)

2014年8月中旬の朝、ラサは昨日までの青空とは違って変わり、朝から雲が低く垂れ込め、小糠雨が降るお天気でした。ヒマラヤ山脈眺望への期待感に水を差されたかのようにでしたが、上空高くに見える山の頂きが明瞭だったので、現地は大丈夫だろうと楽観視しながら、息子と現地ガイドの3人で、ラサ・クンガ空港に向かいました。

ラサ・クンガ空港は小さい空港ですが、警察関係者らの厳しい警戒態勢の下、出国検査の書類不備がないか、長時間しつこく調べられました。出国ゲートを過ぎ、やっと監視の目から逃れられると、清々しい気持ちで飛行機に乗り込みました。いつもは通路側の席を選ぶ私でしたが、ヒマラヤ山脈の眺望を楽しむため、今回は窓側に陣取りました。

さて、ヒマラヤ山脈は、ご存知の通り、世界最高峰のエヴェレストを含む標高7,000m~8,000m級のピークが数多く連なる巨大山脈で、4,500万年前にインド亜大陸をのせているインド・オーストラリアプレートが、ユーラシア大陸のあるユーラシアプレートに衝突、海底が隆起したことにより形成されました。その際、海底の堆積層も隆起したため、山頂付近では海洋生物の化石も見つかっています。依然、そのプレートは北上を続けており、年に数mmから数cm単位で隆起していると言われています。

写真や映像でしか見たことのない雄大な自然美が10,000mの上空から見られるチャンスでした。しかし、真っ青な空を行く飛行機からの眼下には分厚い白雲が広がって、山々を覆い隠し、まったく見えません。一瞬、雲間から白い雪をかぶった険しい峰々を覗くことができましたが、かえって残念さが増しました。この時季、インド洋から北上するモンスーンがヒマラヤ山脈にぶつかり、大量の雨をもたらすこの地方は雨季だそうです。カトマンズ・トリブバン国際空港 到着時は、激しい雨が滑走路を叩きつけていました。

ネパール入国に際し、日本人はビザが要ります。あらかじめ準備していなかった私たちは、到着ロビー設置の機械で申請フォームを作り、現金USD25/人を払って、入国審査と同時にビザを取得しました。ここまではスムーズだったのですが、この大雨で予定していた世界遺産『チトワン国立公園』、バラトプル空港へのフライトはキャンセルとなり、ネパールはカトマンズだけの旅となってしまいました。雨季真っ只中の訪問でしたので、仕方ありません。やはり季節を選ばないといけないなあ、と反省しきりです。中国とネパールの時差は2時間15分と細かくて良いのですが、逆に旅人にはなんだか中途半端で困惑させられます。

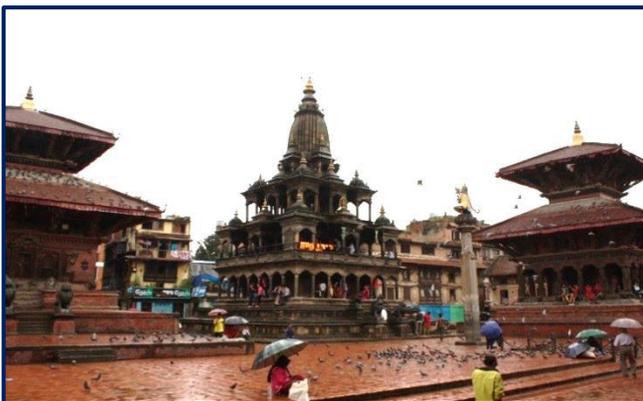
いきなり大雨のパンチを食らわせられ、さらにタクシーも拾えず空港内で立ち往生し、これから先、困るなあ、と、途方に暮れていると、欠航となった国内便航空会社の乗務員専用送迎車に同乗させてもらうという幸運に恵まれました。ホテルのあるタメル地区まで狭い路地をすり抜けながら、軽バンで送ってもらいました。きっと困っている日本人を見るに見かねて助けてくれたのでしょう。ネパールの人々の、旅人への優しさに触れること

ができました。ホテルに到着し、嬉しさを感じながら、警戒心とともに荷物の紐をときました。

カトマンズは聖地であると聞いていたので、個人旅行者やバックパッカーにとっては、どんなところか期待感が膨らんでいましたが、このタメル地区は道が極端に狭く、軽自動車がやっと通れるほどの路地で入り組んでいます。さらにこの大雨で泥道に。これがカトマンズかと驚いていると、インドに行ったことのある息子は、「この狭いところにまだ牛が歩いていないだけ、マシだ」と、苦笑しています。私は、インド（まだ行ったことがない）がこれよりもひどいのかと、カトマンズの安寧さを享受することにしました。

夕食は、この迷路のような路地の一角にある、ネパール料理レストランに入りました。香辛料の効いたカレー味の料理に合う、ご当地エヴェレスト・ビールが美味しかったのが印象的でした。ラサのビールは、高地で酔いが早くなるためか、アルコール度数が2.5%と低く、クチに合わなかったのですが、こちらは日本と同じ5%。やみつきとなり、毎晩お世話になりました。

翌日も引き続き雨が降っていましたが、車を一日チャーターして、カトマンズの隅々まで観光することにしました。世界遺産『カトマンズの谷』は、直径約20kmの範囲内に約900もの歴史建造物が密集する、世界でも例を見ない地域で、1769年にシャハ王朝が誕生して以来、その勢力は、首都であるカトマンズの他、パタン、バクタブルの3つの古都に広がりました。今回の旅は、これらの古都を大急ぎで巡ることとなりました。



最初に訪れたのは、カトマンズ盆地の南にあるパタンで、マッラ三王国時代に栄えた古都として知られています。住民の約8割が仏教徒ですが、ヒンズー教との融合も見られる場所です。ダルバール広場には、旧王宮や珍しい石造りのクリシュナ寺院、2頭のゾウが鎮座するヴィシュワナート寺院など、まるで建築物の見本市のごとく、様々な寺院がところ狭しと並び、その壮観さと美しさに圧倒されました。

次は、カトマンズから東にあり、マッラ王朝時代に三王国の首都として栄えた、バクタブルです。中世の街の様子が、そのまま窺い知る所でした。ダルバール広場を中心に、「55窓の宮殿」と呼ばれる木彫りの窓が並ぶ旧王宮、五層の屋根を持つニヤタポラ寺院やダッタトラヤ寺院などのヒンズー教の寺院が立ち並び、彫刻の実に美しい寺院が数多く残されていました。

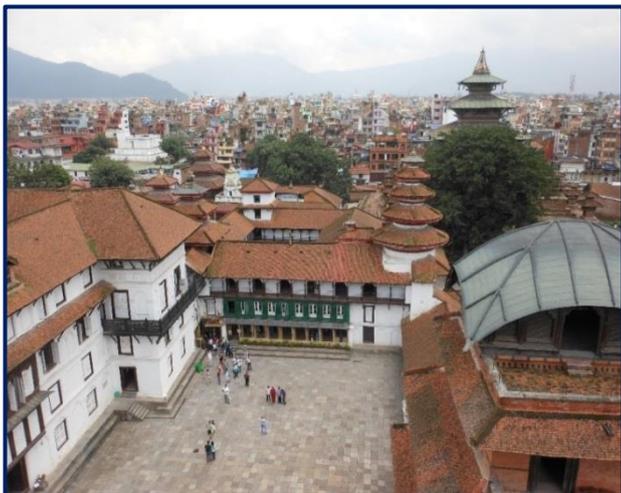


バクタブルからカトマンズへの帰路、ヒマラヤの眺めが素晴らしいとされる標高2,100mのナガルコットに寄りました。天気の良い日には、エヴェレストからアンナプルまで8,000m級の山々を、約200kmに亘って眺望できる、人気の場所だそうです。本日は、雨は上がったものの、澱み雲でまったく見えません。残念でしたが、ここはいつか再挑戦しようと、気持ちを切り替えることにしました。

さて、戻ってきたカトマンズ市内で、まずは西郊の小高い丘の上にある、スワヤンブナート寺院に向かいました。スワヤンブナート寺院は、白色の円い屋根から空高く伸びた金色の仏塔、ストゥーパが特徴的です。ここには密教の本尊仏「大日如来像」が安置されており、ヒマラヤ最古の寺院とされています。仏具のマニ車を回しながら、境内を時計回りに巡礼する熱心な信者たちも見かけました。また、俗に「モンキー・テンプル」と言われるほど、猿が多く生息しているのも印象的でした。

次に訪れたのは、ボダナート。

ネパール最大のストゥーパを誇るチベット仏教の聖地です。曼陀羅を立体的に表しているとされるストゥーパには、スワヤンブナート寺院のものと同様に、ブツダの知恵の眼が描かれ、四方を見渡しています。多くの信者たちが、こちらでも、マニ車を回しながら、時計回りにストゥーパの周りを練り歩いています。私は、その光景にお百度参りする巡礼者の姿を重ね、宗教心というものは形こそ異なりますが、どの国でも心は同じなのだと感心しながら、静かに手を合わせました。一方で、ボダナート境内も寺院周辺と同じく、たくさんの土産物屋が並び、観光地化されていて、少し残念に感じました。



翌日は、天気も回復し、日差しの強いタメル地区の狭い路地を、車やバイクを避けながら、歩いて行きます。まったく異次元の世界です。その感覚に痺れながら着いたのは、ヒンズー教の寺院が密集するカトマンズのダルバール広場です。ハヌマン・ドカの門をくぐり、中庭ナサル・チョークにある9階建てのバサンプル・ダルバールから、街全体を見渡しました。どの方向を見ても、カトマンズ盆地はレンガ色の家々がつぶさに現れ、その歴史の奥深さを感じさせます。

続いて、生き神と崇拜され、国の予言者で、幸運をもたらすとされている「クマリ」の居る、クマリの館へ向かいました。公けには滅多に姿を現さないクマリをひと目見ようと、人々は3階建ての館を見上げます。撮影は絶対にNGです。待つこと15分。おかげで、幸運にも、小さい可愛い少女の生き神、クマリを見ることができました。





さらに、隣接のカーラ・バイラブを参拝。  
ネパールの人々からは“恐怖の神”と畏れられていますが、その姿はどこか可愛い、俗に言う、“ゆるキャラ”みたいな神様でした。

カトマンズは物価も安く、治安も良く、なぜバックパッカーの聖地となっているのか、よく理解できました。また一方では、宗教的に仏教とヒンズー教が混沌とした街ですが、市民は信心深く、いずれの神様にも頭を下げて参拝する姿を見ると、私も自分の宗教観をもう一度見直さねば、と考えさせられる道中でした。今回の旅では、エヴェレストの大自然を直に堪能することはできませんでしたが、日本にはない、宗教的、文化的遺産に数多く触れ、十分に非日常を味わうことができました。溢れる満足感とともに、中国行きの深夜フライトでカトマンズを後にしました。

#### ☆小さなささやき

インド・オーストラリアプレートとユーラシアプレートがぶつかるネパールは、活発な地殻変動が要因となって、2015年4月25日に大地震に見舞われました。私たちが訪れた『カトマンズの谷』の他、世界遺産の多くが甚大な被害を受け、無残にも崩れ去り、跡形もなくなってしまったものもありました。TVでその状況を観て、もう絶句するしかありません。『カトマンズの谷』は、過去何度か地震の被害に遭い、そのたびに危機遺産に登録、脱するということが繰り返されています。多くの遺跡が人為的な要因で危機遺産に登録されている中、自然災害には抗いようもありません。世界各国からの温かい援助で、一日も早く現状が回復されることを、世界遺産アカデミー会員のひとりとして、願うものであります。

(第6話 終わり)